

『梵文無量寿経語彙集』とその活用 本願文・成就文・胎化得失など

中央仏教学院講師 蓮池利隆

はじめに

ここに紹介する『梵文無量寿経語彙集』は科学研究費による成果として製本したものです。藤田宏達博士の和訳本¹がすでに刊行されている中、屋上屋を重ねるものとの批判は免れないでしょうが、なんとか自分で梵文テキストを読破してみたいという人にとっては、語彙集ならではの存在意義もあるでしょうし、また、つたない研究ノートとも思召しめし、ご寛恕を願うところであります。

筆者は「タジキスタン拝火教遺構の発掘調査及び阿弥陀仏の起源としてのミトラ神についての研究」（課題番号 25300041）への助成を受けて中央アジアにおいて現地調査を実施してきましたが、題目にあるミトラ神やゾロアスター教の遺物が多数出土する状況の中、梵文無量寿経再検討の必要性を強く感ずるようになりました。

初期大乘經典に分類される『無量寿経』はクシャーン朝統治下のガンダーラ周辺で成立したと考えられています。クシャーン族の故地は中央アジアのウズベキスタンとタジキスタンの国境スルハン・ダリヤ（川）流域です。この地域の考古学資料からは習俗化したゾロアスター教の存在が確認できます。また、クシャーン朝のコインにはカニシカなどの歴代王が拝火壇に手を差し伸べる姿が刻まれています。

かねてより『無量寿経』を梵文で読みたいと思い、藤田宏達博士の和訳本を頼りに読み進めていましたが、なかなか果たせずにはいました。何としてでも読み通してみたいと思うようになったのは、文科省科学研究費の助成で中央アジア調査に出かける中、イラン文化からの影響を確かめたいという明確な目的ができてからです。二年程前に読み終えましたが、自分も梵文で読んでみたいと思う人の手助けになればと思い、語彙集を製本することにしました。表計算ソフトを用いたエクセル形式の語彙集であれば、ウェブサイトの「蓮池利隆のページ (<http://hasuike.my.coocan.jp>)」からダウンロードすることができます。さらに、こちらのほうが見やすいとも思いますが、語彙集を作成するまえのノート（はじめから終わりまでの約一万六百語すべてを網羅）も掲載しています。

梵文テキストは足利惇氏編『SUKHAVATIVYUHA』²によっており、梵文特有の連声はすべて分かち書きにしています。語彙部の見出し単語は、活用・曲用の形のまま挙げ、同じ形でも文法的に違う場合はそのつど別個に記載しています。写本は29cm×5.5cmの85枚からなる貝葉本で、四行書きです。語句番号は貝葉の連番、a、bは表、裏を示しています。例えば、語彙集の語句番号 9a23 であれば、第9葉表23番目の語句であることを示しています。

また、梵文で『無量寿経』を読むのであれば、浄土真宗の教義において重要な解釈が与えられる、いわゆる『無量寿経』の名所はどうなっているのかということも関心事となるでしょう。ここでは、本願文、本願成就文、胎化得失についてノートから抜き出し、読み進めてみます。

1. 本願文の梵文を読んでみましょう

sacen me bhagavan bodhi-prāptasya^aprameya^asamkhyeyesu buddhakṣetreṣu
ye sattvāḥ mama nāmadheyam śrutvā, tatra buddhakṣetre cittam preṣayeyur,
upapattaye kuśala-mūlāni ca pariṇāmayeyus, te ca tatra buddhakṣetre

na[^]upapadyeran, antaśo daśabhiś citta[^]utpāda-parivartaiḥ,
sthāpayitvā[^]ānantarya-kāriṇaḥ saddharma-pratikṣepa[^]āvarṇa[^]āvṛtāmś ca
sattvān, mā tāvad aham anuttarām samyaksambodhim abhisambudhyeyam.

語彙集から抜き出すと、

sacen (sacet) /不変化辞/もしも、me (me) /人称代名詞附帯辞(単数属格)/私の、bhagavan (bhagavat) /男性名詞(単数呼格)/世尊よ！、bodhi (bodhi) /女性名詞(複合語「覺りに到達した」の前分)/覺り、prāptasya (prāpta) /過去分詞(複合語「覺りに到達した」の後分；男性単数属格)/到達した、apremēya (apramēya) /形容詞(複合語「無量・無数の」の前分)/無量の、asamkheyeṣu (asamkheya) /形容詞(複合語「無量・無数の」の後分；中性複数依格)/無数の、buddhakṣetreṣu (buddhakṣetra) /中性名詞(複数依格)/ (複数の) 仏国土において、ye (yad) /関係代名詞(男性複数主格)/それら~ところの、sattvāḥ (sattva) /男性名詞(複数主格)/衆生たちが、mama (mad) /人称代名詞(一人称単数属格)/私の、nāmadheyam (nāma-dheya) /中性名詞(単数目的格)/名前を・名号を、śrutvā (√śru) /不変化辞(絶対分詞)/聞いて(その後)、tatra (tatra) /不変化辞(副詞)/そこで、buddhakṣetre (buddhakṣetra) /中性名詞(単数依格)/ (それぞれの) 仏国土において、cittam (citta) /中性名詞(単数目的格)/心を、preṣayeyur (pra√iṣ) /動詞(三人称複数願望法)/ (かれらが) 差し向けるであろう、upapattaye (upapatti) /女性名詞(単数与格)/うまれること(生起)のために、kuśala (kuśala) /形容詞(複合語「善根」の前分)/善い、mūlāni (mūla) /中性名詞(複合語「善根」の後分；複数目的格)/根を、ca (ca) /不変化辞(接続詞)/そして、pariṇāmayeyus (pari-ṇam(√nam)) /動詞(三人称複数願望法)/ (かれらが) 成熟せしめるであろう、te (tad) /指示代名詞(三人称複数主格)/かれらが、ca (ca) /不変化辞(接続詞)/そして、tatra (tatra) /不変化辞(副詞)/そこで、buddhakṣetre (buddhakṣetra) /中性名詞(単数依格)/ (この) 仏国土において、na (na) /不変化辞(否定辞)/ない、upapadyeran (upa√pad) /動詞(三人称複数願望法)/ (かれらが) 生まれるであろう、antaśo(antaśas) /不変化辞(副詞)/それほどに・それまでに、daśabhiś (daśa) /数詞(男性具格)/十、citta (citta) /中性名詞(複合語「心の生起の回らし」の前分)/心の、utpāda (utpāda) /男性名詞(複合語「心の生起の回らし」の中分)/生起、parivartaiḥ (parivarta) /男性名詞(複合語「心の生起の回らし」の後分；複数具格)/回らしによって、sthāpayitvā (√sthā, 使役・目的格を取る【仏梵辞】610b) /不変化辞(絶対分詞)/~を除いて、ānantarya (ānantarya) /中性名詞(複合語「無間をおこなう」の前分/無間、kāriṇaḥ (kārin) /形容詞(複合語「無間をおこなう」の後分；男性複数目的語/おこなう(ものたち)を、saddharma (saddharma) /男性名詞(複合語「正法の誹謗という障礙に覆われた」の前分/正しい法の、pratikṣepa (pratikṣepa) /男性名詞(複合語「正法の誹謗という障礙に覆われた」の中分)/敵対・誹謗の、āvarṇa (āvarṇa) /中性名詞(複合語「正法の誹謗という障礙に覆われた」の中分)/障礙、āvṛtāmś (āvṛta) /過去分詞(複合語「正法の誹謗という障礙に覆われた」の後分；男性複数目的格)/覆われた(ものたちを)、ca (ca) /不変化辞(接続詞)/そして、sattvān (sattva) /男性名詞(複数目的格)/衆生たちを、mā (mā) /不変化辞(否定辞)/ない・~するまい、tāvat (tāvat) /不変化辞/その間は、aham (mad) /人称代名詞(一人称単数主格)/わたしは、anuttarām (anuttara) /形容詞(女性単数目的格)/この上ない・無上の、

samyaksambodhim (samyaksambodhi) /女性名詞 (単数目的格) /正等覺を、
abhisambudhyeyam (abhi-sam-√budh) /動詞 (三人称単数願望法) / (わたしは) 覺
るであろう、

以上の語彙を修飾語・被修飾語の係り方を性・数・格の呼応をもとに組み立てていけばよいのですが、文法的に注意すべきこととして、属格絶対句³と接続詞 *ca* の係り方⁴があります。まず、属格絶対句とは主語・述語が属格を取って、時間や条件を示す句を作り上げるもので、本願文では *me* (属格) ... *prāptasya* (属格) の部分が、「私が~到達する時、私が~到達したとして」のように訳すべきものとなっています。また、接続詞 *ca* は、例えば「A B *ca*」とある場合は「A と B は」のように訳します。これらのことに留意して本願文を逐語訳するならば、

「もしも、私が、世尊よ！覺りに到達したとして、無量無数の仏国土において、衆生たちが私の名号を聞いて後に、そこで、それぞれの仏国土において、心を差し向けるであろう、生起のために。そして、善根を成熟せしめるであろうところのものたち、そして、それらのものたちが、そこで、(この) 仏国土において生まれないのである、十回の心の生起の回らしによって。無間をおこない、そして、正法の誹謗という障礙に覆われた衆生たちを除いて。その間は、わたしは無上の正等覺を覺ることはないであろう。」

ぎこちない訳文ではありますが、意味は取れると思います。後は、語順を入れ替えてより滑らかな文に仕上げればよいのです。

2. 成就文の梵文を読んでみましょう

tat kasya hetoḥ. ye kecit sattvās tasya 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam
śṛṇvanti, śrutvā ca[^]antaśa eka-citta[^]utpādam apy adhyāśayena prasāda
sahagatam utpādayanti, sarve te 'vaivartikatāyām samtiṣṭhante
'nuttarāyāḥ samyaksambodheḥ

tat (tad) /指示代名詞 (男性単数主格) /それは、kasya (kim) /疑問代名詞 (男性単数属格) /どのような、hetoḥ (hetu) /男性名詞 (単数属格) /理由の、ye (yad) /関係代名詞 (男性複数主格) /それら~ところの、kecit (kimcit) /不定代名詞 (男性複数主格) /いかなる・或る・どの、sattvās (sattva) /男性名詞 (複数主格) /衆生たちが、tasya (tad) /指示代名詞 (男性単数属格) /その、'mitābhasya (amitābha) /男性名詞 (単数属格) /アミターバ (無量光) (の)、tathāgatasya (tathāgata) /男性名詞 (単数属格) /如来の、nāmadheyam (nāma-dheya) /中性名詞 (単数目的格) /名前を・名号を、śṛṇvanti (√śru) /動詞 (三人称複数現在) / (かれらが) 聞く、śrutvā (√śru) /不変化辞 (絶対分詞) /聞いて (その後)、ca (ca) /不変化辞 (接続詞) /そして、antaśa (antaśas) /不変化辞 (副詞) /それほどに・それまでに、eka (eka) /数詞 (複合語「一心の生起」の前分) /一つ、citta (citta) /中性名詞 (複合語「一心の生起」の中分) /心の、utpādam (utpāda) /男性名詞 (複合語「一心の生起」の後分；単数目的格) /生起を、apy (api) /不変化辞~また・~さえ、adhyāśayena (adhyāśaya) /男性名詞 (単数具格) /意志によって・決心によって、prasāda (prasāda) /男性名詞 (複合語「清浄さをともなった」の前分) /清浄さ・澄浄さ・信、sahagatam (sahagata) /形容詞 (過去分詞) (複合語「清浄さをともなった」の後分；男性単数目的格) /ともなった、utpādayanti (ut√pad

使役形) / 動詞 (三人称複数現在) / (かれらは) 起す、sarve (sarva) / 形容詞 (男性複数主格) / すべての、te (tad) / 指示代名詞 (三人称複数主格) / (かれらは)、'vaivarttikatāyām (avaivarttikatā) / 女性名詞 (単数依格) / 退転することのない状態 (不退転) において、saṃtiṣṭhante (saṃ√sthā) / 動詞 (三人称複数現在) / (かれらは) 住する、'nuttarāyāḥ (anuttara) / 形容詞 (女性単数従格) / この上ない・無上の、samyaksambodheḥ (samyaksambodhi) / 女性名詞 (単数目的格) / 正等覚から、

「それはどのような理由のものか。それらいかなる衆生たちも、そのアミターバ如来の名号を聞いて、そして、聞いて後、それほどに一心の生起を、意志によって、清浄さをとめたものを起す。すべてのかれらは、退転することのない状態 (不退転) において、住する、その無上の正等覚から。」

重要な御文でありますので、藤田宏達博士の和訳も引用しておきます。

「たとえ一たび心を起すだけでも、浄信にともなわれた深い志向をもって心を起すならば、かれらはすべて、無上なる正等覚より退転しない状態に安住するからである」⁵

すでに多くの指摘があるように、この梵文テキストに限って言えば、正依の『無量寿経』本願成就文に説かれる「即得往生住不退転」の「即得往生」に相当する記述はありません。一方で、同じ梵文テキストの中、「即」(時を移さず同時に)を表現する語法は、従格を伴った saha によるものが散見されます。その用例を挙げると、

19a18,19b41,13a25,23b49,14b24,25a20,25a48,25b14,61a49,63b15,63b50,

以上の 11 カ所があります。その中から、正依『無量寿経』の第四十七願、第四十八願の願文にはそれぞれ「我が名字を聞きて、即ち不退転に至ることを得ずば、」「我が名字を聞きて、即ち第一・第二・第三法忍に至ることを得ず、諸仏の法に於いて即ち不退転を得ること能わすば、」とあるのに相応する部分を指摘することができます。ほぼ同じ句法ですので、第四十八願に相当する部分のみを以下に示しました。

tatra buddhakṣetre ye bodhisattvā mama nāmadheyaṃ śṛṇuyus, te saha
nāmadheya-śravaṇān na prathama-dvitiya-tṛtīyāḥ kṣāntīḥ pratilabheran,
na^avaivarttiko bhaved buddha-dharmebhyo,

tatra (tatra) / 不変化辞 (副詞) / そこで、buddhakṣetre (buddhakṣetra) / 中性名詞 (単数依格) / (それぞれの) 仏国土において、ye (yad) / 関係代名詞 (男性複数主格) / それら~ところの、bodhisattvā (bodhisattva) / 男性名詞 (複数主格) / 菩薩たちが、mama (mad) / 人称代名詞 (一人称単数属格) / 私の、nāmadheyaṃ (nāma-dheya) / 中性名詞 (単数目的格) / 名前を・名号を、śṛṇuyus (√śru) / 動詞 (三人称複数願望) / (かれらが) 聞くであろう、te (tad) / 指示代名詞 (男性複数主格) / それらが、saha (saha) / 不変化辞 (従格を伴って) / ~同時に、nāmadheya (nāma-dheya) / 中性名詞 (複合語「名号を聞くこと」の前分) / 名前・名号、śravaṇān (śravaṇāt < śravaṇa の従格) / 中性名詞 (複合語「名号を聞くこと」の後分; 単数従格/聞くことから、na (na) / 不変化辞 (否定辞) / ~ない、prathama (prathama) / 序数詞 (複合語「第一・第二・第三の」の前分) / 第一の、dvitiya (dvitiya) / 序数詞 (複合語「第一・第二・第三の」の中分) / 第二の、tṛtīyāḥ (tṛtīya) / 序数詞 (複合語「第一・第二・第三の」の後分; 女性複数目的格) / 第三の、kṣāntīḥ (kṣānti) / 女性名詞 (複数目的格) / 耐え忍ぶことを・忍 (辱) を、pratilabheran (prati√labh) / 動

詞（三人称複数願望）/（かれらが）得るであろう、na (na) /不変化辞（否定辞）/～ない、avaivarttiko (avaivarttika) /形容詞（男性単数主格）/退転しないもの、bhaved (√bhū) /動詞（三人称単数願望）/（かれが）～であろう、buddha (buddha) /男性名詞（複合語「仏陀の法」の前分）/仏陀の、dharmebhyo (dharma) /男性名詞（複合語「仏陀の法」の後分；男性名詞単数従格）/法から、

以上を逐語訳すれば、

「そこで、それぞれの仏国土において、それらの、私の名号を聞くであろうところの菩薩たち、それらが名号をきくことから同時に、第一・第二・第三の忍を得るであろうことがなく、仏陀の法から退転しないものであろうことがない、(ならば)」
となるでしょう。これらの従格を伴った saha の句法は、時を分かつて、即時に、という意味となり、例えば「聞即信」といったあり方を遺憾なく表すことになるのです。残念ながら、梵文の本願成就文においてこの句法は使用されていません。

3. 胎化得失の梵文を読んでみましょう

tat ko 'tra bhagavan hetuḥ, kaḥ pratyayo, yad anye punar garbha^āvāse prativasanti;
anye punar upapādukāḥ paryaṅkaiḥ padmeṣu prādurbhavanti.
bhagavān āha: ye te 'jita bodhisattvā anyeṣu buddhakṣetreṣu sthitāḥ sukhāvatyāṁ
lokadhātāv upapattaye vicikitsām utpādayanti, tena cittena kuśala-mūlāny
avaropayanti, teṣāṁ atra garbha^āvāso bhavati.

tat (tad) /指示代名詞（中性単数目的格＞不変化辞）/それは、ko (kim) /疑問代名詞（男性単数主格）/何の・どのような、'tra (atra) /不変化辞/ここに・ここで、bhagavan (bhagavat) /男性名詞（単数呼格）/世尊よ！、hetuḥ (hetu) /男性名詞（単数主格）/理由が、kaḥ (kim) /疑問代名詞（男性単数主格）/何の・どのような、pratyayo (pratyaya) /男性名詞（単数主格）/証拠が、yad (yad) /関係代名詞（中性単数目的格＞不変化辞）/その、anye (anya) /形容詞（男性複数主格）/他の者たち、punar (punar) /不変化辞/また・ふたたび、garbha (garbha) /男性名詞（複合語「母胎の住処」の前分）/母胎、āvāse (āvāsa) /男性名詞（複合語「母胎の住処」の後分；単数依格）/住処において、prativasanti (prati√vas) /動詞（三人称複数現在）/（かれらが）住する、anye (anya) /形容詞（男性複数主格）/他の者たち、punar (punar) /不変化辞/また・ふたたび、upapādukāḥ (upapāduka) /形容詞（男性複数主格）/化生した、paryaṅkaiḥ (paryaṅka) /男性名詞（複数具格）/寝椅子（カウチ）によって、padmeṣu (padma) /男性名詞（複数依格）/蓮華たちにおいて、prādurbhavanti (prādur√bhū) /動詞（三人称複数現在）/出現する、bhagavān (bhagavat) /男性名詞（単数主格）/世尊は、āha (√ah) /動詞（三人称単数完了）/（かれは）言った、ye (yad) /関係代名詞（男性複数主格）/それら～ところの、te (tad) /指示代名詞（男性複数主格）/かれらは、'jita (ajita) /男性名詞（単数呼格）/アジタよ！、bodhisattvā (bodhisattva) /男性名詞（複数主格）/菩薩たちは、anyeṣu (anya) /形容詞（中性複数依格）/他の、buddhakṣetreṣu (buddhakṣetra) /中性名詞（複数依格）/仏国土において、sthitāḥ (sthita) /形容詞＜過去分詞（男性複数主格）/住した、sukhāvatyāṁ (sukhāvatī) /女性名詞（単数依格）/スカヴァティーにおいて、lokadhātāv (lokadhātu) /男性名詞（単数依格）/世界において、upapattaye (upapatti) /女性名詞（単数与格）/生起のために、vicikitsām (vicikitsā) /女性名詞（単数目的格）/疑いを・不安を、utpādayanti (ud√pad, 使役) /動詞（使役三人称複数現在）/（かれらが）起こす、tena (tad) /指示代名詞（中性単数具格）/その、cittena

(citta) /中性名詞 (単数具格) /心によって、kuśala (kuśala) /形容詞 (複合語「善根」の前分) /善い、mūlāny (mūla) /中性名詞 (複数目的格) /根を、avaropayanti (ava√ruh 使役) /動詞 (三人称複数現在使役) / (かれらは) 植える、teṣāṃ (tad) /指示代名詞 (男性複数属格) /それらの、atra (atra) /不変化辞/ここに・ここで、garbha (garbha) /男性名詞 (複合語「母胎の住処」の前分) /母胎、āvāso (āvāsa) /男性名詞 (複合語「母胎の住処」の後分; 単数主格) /住処が、bhavati (√bhū) /動詞 (三人称単数現在) /ある

以上から逐語訳を挙げれば、以下のようになります。

「そこに、世尊よ！それはどのような、理由があり、どのような証拠があるのか。そのところの、他の者たちがまた、母胎の住処において住し、他の者たちがまた、化生して寝椅子によって蓮華たちにおいて出現するのは。世尊は言った。アジタよ！それらのところのそれらの他の仏国土に住した菩薩たちは、スカーヴァティ世界においての生起のために、疑いを起し、その心によって、善根を植える。その者たちには、ここに母胎の住処がある。」

ここでは蓮華の胎内に化生することが述べられていて、胎生か化生かという二通りの生まれ方としての区別はなされてはいません。

また、梵文では、マーイトレーヤ (弥勒) の名は靈鷲山の会座に仏弟子たちとともに集まった菩薩の筆頭として説かれ、胎化得失を説く部分では別称のアジタとなっています。これに対して、正依の『無量寿経』ではほぼ逆転していて、会衆の記述では阿逸多菩薩と説かれ、胎化得失を説く部分では弥勒 (慈氏) となっています。疑城胎宮の教説の時に弥勒 (阿逸多) が対告衆として登場するのは何故でしょうか。

阿逸多 (ajita) という語はエジャートン仏教混淆梵語辞典⁶ではマーイトレーヤの別称であるとあり、モニエル梵語辞典によれば、動詞√ji の過去分詞に否定の接頭辞 a が付けられたもので、征服されたことのない、支配されていない、の意味です。仏陀のことを勝利者 jina と称するのも同じ動詞由来の名詞です。この征服されたことのないものとは「煩惱によって征服されたことのない」というよりももっと具体的に、「敵対者によって征服されたことのない」の意味ではないかと考えられます。それは弥勒の語源となったインド・イラン共通の神格であるミトラ (ミフル) の特性を端的に表した言葉であります。ゾロアスター教では冥界の有力な神格であり、かつ軍神、契約の神としてミトラ (ミフル) が信仰されていました。

4. 疑城胎宮と留置天 (ハミスタガン) との類似点

ゾロアスター教の教義中、疑城胎宮ときわめて類似する天界 (ハミスタガン) の存在を指摘することができます。科研費による出土文物の整理・調査と並んで、文献学面からの研究も進めてきましたが、その中から中世ペルシア語で書かれたゾロアスター教文献『アルダー・ウィラーズ・ナーメ』⁷を紹介しましょう。

この作品は、全 101 章から構成されており、概略は以下のようです。

ペルシア国が異国の宗教によって混乱した時代を経た後、アルダー・ウィラーズはその敬虔さの故に、ゾロアスター教信仰の真实性を明らかにするため、冥界旅行を遂行するように選ばれます。彼は酒と麻薬を飲んで昏睡状態に陥った後、彼の魂は冥界へと旅立ちます。まず、彼の信仰と功德の権化であるディンと名づけられた美しい女性から挨拶を受けます。冥界の入り口であるチヌヴァト橋を渡った後、彼は敬虔なるスローシュ

と精霊アードゥルに導かれ、まずハミスタガンと呼ばれる中間界を経て、有徳ではあったけれどもゾロアスター教を信仰しなかった人々に割り当てられた「星の駅」「月の駅」及び「太陽の駅」という世界を通過します。最上天において、ウィラーズは、彼に神聖な者（アフラヴ）たちの魂を示すアフラ・マズダーに会います。各人は、生前の生き方の理想化された型、すなわち男も女も、戦士、農夫、羊飼、または他の職業に従事するものとして表現されています。次に、邪悪な者たちの苦痛を示すために、案内人たちは彼を下方の地獄へと導きます。彼の幻想的旅行が終わり、ウィラーズはアフラ・マズダーから、ゾロアスター教の信仰が生き方における唯一の適切かつ真実の道であり、それは繁栄と荒廃の両方において守られるべきことであると告げられます。

以上の冥界の中、留置天としてのハミスタガン（第6章）は疑城胎宮の起源を考える上で興味深いものであります。

第6章では、ウィラーズはある場所に導かれ、幾人かの靈魂を見ます。その者たちは同じ場所に立ち続けています。そこで、ウィラーズは精霊スローシュとアードゥルに尋ねます。「それらは誰ですか。何故、この場所にいますのですか？」と。精霊スローシュとアードゥルは答えます。「この場所はハミスタガンと呼ばれています。また、これらの靈魂は最後身までこの場所にいます。これらの人々の靈魂は正しい行為と罪悪が釣り合っていました。さて、汝は現象世界（ゲーティグ）の者たちにしかりと告げなさい。すなわち、貪りや悲しみの中では、より少ない善などを保ってはならない。何故ならば、その者の全ての善行が3スローシュチャラナンの善行より多ければ、罪びとは天国に赴き、その者の罪業が重ければ地獄へ赴く。その善悪の二業が釣り合うと、最後の時の身体まで、このハミスタガンに留まる。また、それらの者への罰は、大気の移り変わりによる寒さと暑さによるもので、他の災いはない」と。

このハミスタガンは天界に昇る手前の世界として描かれています。そこは、善業と悪業が等しくなった靈魂が留め置かれる場所です。世界の終りまで留置されますが、地獄のような責苦からは免れるというのです。ここでスローシュは人間界に帰って人々に善を積むようにとの警告を与えています。

まとめ

胎化得失は釈尊が弥勒菩薩に訓戒を与えるという形をとっています。ここで弥勒菩薩はゾロアスター教の指標として説かれているように思われます。冥界の有力な神格ミトラを起源とする弥勒菩薩を相手に胎宮に赴くことのないように訓戒を与える。それはゾロアスター教徒を仏教に取り込むための巧妙な比喻であったと考えられるのです。阿弥陀仏の起源がミトラであった可能性⁸を考慮すれば、『無量寿経』が釈尊から弥勒に付属される点にも、ミトラから弥陀（阿弥陀）、そして弥勒へのつながりが示唆されています。そして、そこに意識されていたのはゾロアスター教であったと考えられます。

【後註】

1. 藤田宏達訳『新訂 梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』（法蔵館、1975年初版）
2. 足利惇氏編『SUKHAVATYUHA』（ed. par Atsuuji ASHIKAGA, HOZOKAN（法蔵館 1965）
3. 属格絶対句については、辻直四郎『サンスクリット文法』（岩波書店、1974年初版）p.289、「附録A 格の用法」を参照して下さい。

4. 接続詞 *ca* の係り方については、同上、p.98 を参照して下さい。
5. 足利惇氏編校訂『SUKHAVATIVYUHA』p.43、藤田宏達・和訳本 p.108 頁。
6. Franklin Edgerton, “BUDDHIST HYBRID SANSKRIT DICTIONARY”、仏教梵語を読むためには欠かせない辞書の一つ。
7. Martin Haug, “The book of Arda Viraf”1872 年を底本にしました。ウィラーフが伝統的だとされているようですが、山内和也『パフラヴィー語 ―その文字と文法―』にしたがって、ウィラーズと表記しています。文法についてもこの本を参照。また、語彙については、D. N. Mackenzie, “A concise Pahlavi dictionary”を使用しました。
8. 拙稿「阿弥陀と弥陀」（中央仏教学院紀要、18 号, pp. 35-51, 平成 19 年）など